



Title	中国における市場経済化の移行過程と初期条件に関する地理学的研究—華南における工業化と地域開発を中心に—
Author(s)	許, 衛東
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101584
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (許 衛 東)	
論文題名	中国における市場経済化の移行過程と初期条件に関する地理学的研究 —華南における工業化と地域開発を中心に—
論文内容の要旨	
<p>本論文の中心的課題は中国経済の市場的発展の初期形態を形成した移行期（1970年代末～90年代中期）の歴史的含意を再認識することである。具体的に地域経済発展論の枠組みと視座から改革のフロンティアとして知られる華南地域の工業化と地域開発を解析することにより、市場メカニズムの導入に伴う産業と地域の成長パターンの変化および改革の方向付けに初期条件が与えたインパクトなどの課題について地理学の方法に沿う実証分析を行うことである。</p> <p>本研究の構成は以下の通りである。</p> <p>I 章 本論文の研究意義と構成</p> <p>II 章 市場経済移行期（1978～90年代中期）における中国の経済改革と工業配置の変動</p> <p>III 章 華南珠江デルタにおける市場経済移行期（1978～90年代中期）の工業発展と外資導入</p> <p>IV 章 清末・民国期（19世紀末期～1930年代後期）における珠江デルタ蚕糸業の勃興と産地構造からみた華南の近代初期工業化の特質</p> <p>V 章 海南島における天然ゴムプランテーション（国有農場）の拡大過程からみた華南の周辺地域の位相</p> <p>VI 章 本論文の結論と今後の課題</p> <p>先行研究との関係で、本論文の検証課題は主として次の3点となる。1つ目は、産業変動論や産業立地論と関連付けた改革開放期の中国経済成長過程の市場経済発生機構についてである。2つ目は、工業化の過程における産業集積の発生メカニズムを政策論に限定せず、国民経済成長と国際分業の拡大に対応する市場進化という視角から分析・精査する作業である。3つ目は歴史的視野から中国市場経済化の性格について、経済発展論における初期条件（initial condition）、体制移行論における初期条件、ノースの言う経路依存性（path dependence）、前近代まで遡る市場の発達経験と社会主義工業化時代の蓄積によって構成されるその歴史的遺産（historical legacy）を地域経済のエビデンスによって意味づけする作業である。</p> <p>本研究の成果と学術的貢献は以下のようにまとめることができる。</p> <p>II 章では、市場経済移行期における中国経済の動向を主に工業配置の側面から検討した。この間の中国経済は、市場メカニズムの導入を契機に、社会主義諸国のなかでは勿論、ANIES・ASEANにもひけをとらない高度成長をなし遂げた。その過程で、資本・技術・市場の相互浸透を軸に、対外依存関係も拡大しつつあった。このような市場経済下の統一市場形成に向かう過程において、国民経済内の複数の工業地域間分業を成立させた地域間競争は中国における体制移行と初期の市場経済成長の原動力となった。この事実の解明は本稿における第一の貢献である。</p> <p>従来、イギリスやアメリカに代表される先発の資本主義国では、国土を構成する諸地域の中で、一つの地域内で第一次素材生産から最終製品まで一貫生産がなされ、地域間分業としては、むしろ異なった製品を交換しようという比較優位に基づく水平分業が一般的であった。これに対して、後発資本主義の日本において、第一次素材生産地域、最終製品生産地域がそれぞれ別に存在し、一つの最終製品をめざして加工段階ごとに地域間分業が行なわれるという一種の垂直的な分業が指摘された。それをさらに具体化した独占的企業の市場分割立地という仮説が導入・立証され、即ち国内市場規模がまだあまり大きくない段階において、同種製品についてある企業は、ある一地域の工場だけで全国市場をカバーし、しかもそのような企業のなかで東日本を拠点とするもの、あるいは西日本を拠点とするものと分かれており、各々の拠点に近い所で優位性が発揮されるというものである。いわば、企業間の市場地域分割の段階である。しかし、国内市場が急速に拡大すると個々の企業規模も拡大し、しかも第一の工場では需要に応じられなくなってくる。この段階に至ると、東日本を拠点としていた企業は西日本に、逆に西日本を拠点としていた企業は東日本に、各々新工場を立地させて市場供給を行うというプロセスが展開する。いわば企業内の市場地域分割である。</p> <p>上記の欧米型及び日本型に対して改革開放期の中国の場合、市場ルールも、耐久消費財に代表される売れ筋商品の生産も、国有企業を除く独占ないし成長企業もほとんど存在しなかった。鉄鋼産業のように素材生産も共和国間</p>	

分業原則というソビエトのゴスプランに由来する6大経済区配置という厳格な国家管理体制に置かれていたため、垂直的分業による工業地域の拡大から局地的市場圏を創出するという基本条件すら欠落していた。

そこで、1978年以降における経済特区、開放都市、広域開発区などに代表される大規模開発極の設置や県・市・省レベルへの地方分権化の政策導入が価格自由化の市場効果を受益しやすい消費財工業を中心に、最初は沿海部における省の間、次第に全国を巻き込む地域間の投資競争と経済成長第一主義の地方動員体制を本格化させた。生産設備や素材の制約から国際的サプライチェーンに組み入れる発展形態を選択する地域もあったが、各地の「重複建設」に象徴される地域内の垂直統合の事業計画が大量の地域企業を生み出し、全国的にみれば品不足という供給ネックの状況を大きく改善した。やがて、地域間の成長格差を背景に市場の淘汰が始まり、効率化追求の制度圧力から産業高度化と共に農村工業化由来の郷鎮企業や地方の国有企業の民営化を加速させるようになった。さらに、一部の地域では、グローバル競争に耐え得る大企業も育ち、全国市場向けの経営を展開するための多拠点工場立地を開始した。結果として、日本に代表される後発資本主義の類型に近づいてきたといえる。

このように徹底された私有制と整備された金融市場が欠如していたなかで、成長一辺倒の改革方針を貫徹する競争が繰り広げられた。地域政府間の競争が地域のインフラ投資と産業投資の成長に傾斜しつつ、金融深化と金融・資本市場の発展を速めた。地域が成長のために繰り広げる競争が過度な投資を招いてしまう弊害がある反面、市場経済に反する意思決定の誤りを減らし、市場の淘汰を維持することによって結果的に比較優位に違反するフルセット型の工業化戦略のリスクを回避できた。

Ⅲ章では、対外経済活動との連関から、華南中心部の珠江デルタにおける市場移行期前後の工業化の発生メカニズムについて検証した。従来、ガーゼンクローンの「後進性の優位」からすれば、備蓄された技術革新を借用可能にする制度が重要であり、特に現代中国については、政府に加えて外資（FDI）や華人社会の経済ネットワークが重要な制度回路になっていることが仮説として提示されている。全国の工業体系における珠江デルタの地位は、極めて重要かつ独特な役割を持つものであり、空間的分節化に注目しながら工業を柱に拡大した珠江デルタの市場経済発展を実証したⅡ章の結論は上記の仮説を強く裏付けた。これは本稿における第二の貢献である。

中国全体でみると、対外開放の空間的広がりはまだ沿海の開放都市に限定されていたなかで、珠江デルタは外資導入による創業刺激の活力を全域に浸透させ、強い生産連関・連鎖の広がりを意図した地域内分業型の工業化の誘発につながった。

従来、中国の経済開発において経済パフォーマンスの良き悪しさを測る成長地域ないし経済センターは主に3種類からなっていた。即ち、第1に、上海や天津のような租界時代からの民族工業を吸収して消費財の生産に特化した工業都市、第2に、日本による満州経営時代の遺産に加えてソビエトからの生産財技術の全面的支援が接ぎ木して開花した東北部の重工業地帯、第3に資源開発や工業用素材に代表される毛沢東時代の内陸「三線建設」路線から生まれた鉱業都市などである。

改革開放政策が導いた市場経済化の過程において、珠江デルタは上記の地域類型と異なる新たな成長地域として頭角を現した。その工業開発は広東省の地方政府・企業の自主経営権の拡大と、香港自体の産業構造の再編に伴う生産機能の拡散、珠江デルタが伝統的な華僑の郷として有する華僑・華人資本の吸引力と香港への近接性、対外貿易の歴史的伝統から育った創業精神と、企業経営・管理の技術的ノウハウの吸収に対する意欲などによって促された。

上記の珠江デルタの工業化と外資導入が、中国の市場経済化の柔軟性を含意する重要な経済現象としての「華南経済圏」の言質を登場させ、同時に、工業化地域の急速な都市化・香港化の背後に要素の高い流動性によって促される経済発展のパターン変化も生じつつ、先進国との同質性を高めた。よって、経済基盤理論、資本・労働力の移動理論、成長の極理論、プロダクト・ライフサイクル理論などに代表される資本主義対象の説明方法の中国経済研究への導入もある程度の適合性を有するに至った。

Ⅳ章では、器械製糸業という華南の近代史における優れた地域的現象に注目し、特に産業資本の構成と賃金水準の検証により、産地の拡大過程を担う社会階層間の柔軟な関係性を抽出する成果を成し遂げた。

Ⅴ章では、華南最南部の海南島における農業開発の経緯と成果を主産地形成、即ち国营農場の天然ゴム栽培加工産業の成立過程から検証した。海南島の開発は結局工業原料供給の貢献とされるゴム経済というモノカルチャーを周辺地域に根付かせたが、市場経済移行期以降、ゴム輸入の自由化と華南の自動車産業およびタイヤ輸出産業の発達により、激しい国際市場価格の競争に巻き込まれる局面を迎えながら、その枠内において地域形成と地域分化が進行するという辺境農業地域の構造的特質がより鮮明になった。

上記のⅣ章とⅤ章で示された各々の地域の市場経済発展の歴史的過程に対応する各々の地域性の性格及びその作用の重要性を歴史の連続性と非連続性という文脈から再確認した作業は、本稿における第三の貢献である。

加えて、当初中央政治の失敗を回避するための「実験モデル」の提案に由来する計画地域の一部であった「珠江

デルタ経済開発区」と「華南天然ゴム基地」がそれぞれ産業集積と技術開発の成果を得て今日の中国経済地域を構成する実質地域に転化する事例として抽出できた。この特徴は、中国における地域類型の分類を精査するうえで重要な参考となる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (許 衛 東)			
	(職)		氏 名
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	堤 研二
	副 査	大阪大学 教授	堤 一昭
	副 査	大阪大学 准教授	井本恭子
	副 査	大阪大学 准教授	大呂興平
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 中国における市場経済化の移行過程と初期条件に関する地理学的研究
— 華南における工業化と地域開発を中心に —

学位申請者 許 衛東

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	堤 研二
副査	大阪大学教授	堤 一昭
副査	大阪大学准教授	井本恭子
副査	大阪大学准教授	大呂興平

【論文内容の要旨】

本論文の中心的課題は、今日における中国経済の市場的発展の初期形態を形成した経済移行期（1970 年代末～90 年代中期）の歴史的含意を再認識することである。具体的には、地域経済発展論の枠組みと視座から改革開放政策のフロンティアとして知られる華南地域の工業化と地域開発のプロセスを解析することにより、市場メカニズムの導入に伴う産業と地域の成長パターンの変化および初期条件がどのように改革の方向付けにインパクトを与えたのかという課題群について、地理学の方法に沿う実証分析を行ったものである。

本研究の内容は以下の通り、序章・終章を含めて 6 章構成となっている。

序章では、市場経済移行期における成長地域の代表格である華南の工業化と地域開発のプロセスに焦点を当てて、地理学の視座と分析方法に基づいて地域経済の発展を促した市場発生のダイナミクスの抽出作業を試みる方法と手順について述べている。I 章では中国における 1990 年代中期までの市場経済の移行過程に注目し、なかでも体制転換をプッシュする新しい地域開発政策による工業化の促進効果にスポット・ライトを当てている。II 章では華南経済中心部の珠江デルタ地域の工業化過程を取り上げ、産業集積の形成条件と国際分業下の発展ダイナミズムを解析している。III 章では清末・民国期における珠江デルタ地域の蚕糸業の発展条件と産地構造を史料分析に基づいて明らかにし、歴史の中に継承される地域性の特質を再確認している。IV 章では海南島の天然ゴムプランテーションの確立過程を検証することにより、華南工業化の過程における周辺地域の存立構造を探求している。終章では、本論の要約を行ったうえで、本研究が提示した学問的知見・成果について触れている。具体的には、本研究の成果・学術的貢献は以下のようにまとめることができる。

I 章では、市場経済移行期における中国経済の動向を主に工業配置の側面から検討している。この間の中国経済は、市場メカニズムの導入を契機に、社会主義諸国のなかでは勿論、NIEs・ASEAN にもひけをとらない高度成長をなし遂げた。その過程で、資本・技術・市場の相互浸透を軸に、対外依存関係も拡大しつつあった。このような

市場経済下の統一市場形成に向かう過程において、国民経済内の複数の工業地域間分業を成立させた地域間競争は中国における体制移行と初期の市場経済成長の原動力となった。この事実の解明が、本論文における第一の成果である。

Ⅱ章では、対外経済活動との連関から、華南中心部の珠江デルタにおける市場移行期前後の工業化の発生メカニズムについて検証している。従来、ガーシェンクロンの「後進性の優位」からすれば、備蓄された技術革新を借用可能にする制度が重要であり、とくに現代中国については、政府に加えて外資（FDI）や華人社会の経済ネットワークが重要な制度回路になっていることが仮説として提示されている。全国の工業体系における珠江デルタの地位は、極めて重要かつ独特な役割を持つものであり、空間の分節化に注目しながら工業を柱に拡大した珠江デルタの市場経済発展を実証したⅡ章の結論は上記の仮説を強く裏付けた。このことが本論文における第二の成果である。

Ⅲ章とⅣ章における各々の地域の市場経済発展の歴史的過程に対応する、各々の地域性の性格及びその作用の重要性を歴史の連続性と非連続性という文脈から再確認した作業は、本論文の第三の成果と言える。くわえて、当初中央政治の失敗を回避するための「実験モデル」の提案に由来する計画地域の一部であった、「珠江デルタ経済開発区」と「華南天然ゴム基地」が、それぞれ産業集積と技術開発の成果を得て今日の中国経済地域を構成する実質地域に転化する事例として抽出されている。この特徴は、中国における地域類型の分類を精査するうえで重要な参考となる。この指摘は、本論文の第四の成果である。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、中国の市場経済化への移行過程における経済成長・工業化の背後にあった、地域および地域間関係の変動について、華南地域を対象とした調査をもとに、多角的に論じたものである。

本論文は、主として査読付き学会誌を含む学術誌等に掲載された論文をもとに修正・再構成されており、マクロな時代背景・経済政策への目配りをしつつ、緻密な現地調査に基づく実証分析や比較研究が展開されており、個々の章における完成度は非常に高い。とくに、Ⅰ～Ⅳ章における経済政策や歴史的産業展開にも着目しつつ、緻密な実証分析を行っている部分は圧巻であり、経済地誌的分析をベースとした、経済発展史の理論的研究の優れた試みである、と言えよう。ローカルとグローバルのマルチ・スケールに留意しながら、中国で成長著しかった華南地域の経済変動を取り扱った研究としては、他の追随を許さない成果を提示したものである。

一方で本論文の弱点が指摘できないわけではない。例えば、華南経済圏の地域設定と華南珠江デルタ・海南島の経済圏間の関係性・階層構造の明示や、空間における経済のダイナミクス・中国の国家的経済政策・グローバル化において拮抗する営力関係などへの目配りがより鮮明であれば、本論文の成果の位置づけをいっそう明確にできたのではないかと考えられる。

しかしながら、そのような点があったとしても、本論文の極めて優れた分析の大きな価値を貶めるものではない。国際的な観点からみても、非常に秀でた経済地理学的研究論文として高く評価できるものである。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。